

# Ocean Breeze

Newsletter of the Atmosphere and Ocean Research Institute  
The University of Tokyo

2011

冬

第3号

## CONTENTS

特集

- 02 動物が記録する科学  
バイオロギングサイエンス
- 04 「船乗り」ってどんな仕事？
- 05 書き手自身による新刊紹介  
受賞／人事異動
- 06 イベントレポート
- 07 AORI スタッフ日誌
- 08 From Alumni AORI 出身のひとびと  
新スタッフ紹介



アカウミガメ  
佐藤克文提供

# 動物が記録する科学

## バイオロギングサイエンス

深度1000mまで潜るマッコウクジラや、数百km離れた海域まで長距離「通勤」して餌を漁るオオミズナギドリなど、海を広範囲に動き回る動物たちに研究者が付いて行って観察することはできません。また、産卵のため砂浜に上陸してくる雌ウミガメの様子ならば、しげしげと眺めることはできます。しかし、一生を海で過ごす雄ガメや、性成熟する前のカメがどこで何をしているのかといったことは、どうやって調べたらよいのでしょうか。なじみ深い動物でありながら、その生活史が謎に包まれている海の動物たちが数多くいます。

### バイオロギングサイエンスとは？

このような動物たちには、研究者がついて行って行動を観察することができません。そこでデータロガーと呼ばれる小型の記録装置を動物にとりつけるやり方で、調査が進められています。近年のエレクトロニクス分野の発展によりセンサが多様化し、深度・温度・速度・加速度・地磁気・画像など多くの情報が得られるようになり、かつ、小型で記憶容量の大きな装置ができました。記録装置をどうやって動物にとりつけ、いかに回収するかということに頭を悩ませますが、装置さえ回収できればこっちのもの。それまで誰も知らなかったことが手に取るようになります。

バイオロギングサイエンス(Bio-Logging Science)と名付けられたこの新しい分野は、「動物が記録する科学」とも言われています。その名の通り、データをとってくるのは動物自身。時には研究者が想定していなかった動きをすることもありますが、それもまたこの分野の醍醐味です。

### プロジェクトの目的

概算要求特別経費「先駆的海洋科学創成に向けた革新技術の開発事業」(国際的に卓越した教育研究拠点の充実)の支援を受けて、大気海洋研究所ではバイオロギングサイエンスプロジェクト(Bio-Logging Science, The University of Tokyo:UTBLS)を進めています。その目的は、研究者たちが必要としている装置を開発・改良して、その装置を用いた共同研究を進め、研究成果をまとめる過程を通して人材育成をすることにあります。所外や国外にも協力者を得て、所属機関や国境といった垣根を越えた共同研究が、極域から温帯や熱帯地方のフィールドで展開されています(次ページで紹介する3つの研究は、その例です)。

### アウトリーチ

地球環境問題に対する社会の関心は高まっています。環境変動をもたらす主要因や、その変動が人間や動植物にもたらす影響

について、皆が知りたがっています。しかし、専門化や細分化が進んだ最先端の研究成果をわかりやすく伝えるのは難しいものです。

幸い、クジラ・イルカ・アザラシ・ペンギン・ウミガメなどといった海の動物たちに対して、世間の人たちは高い関心を持っています。自然と触れあう機会が減った子供たちの理科離れは深刻ですが、わかりやすく伝えることさえできれば、みな目を輝かせて話に聞き入ってくれます。地球環境問題について勉強し、将来環境を守ることに貢献したいと考えている中高生も数多くいます。

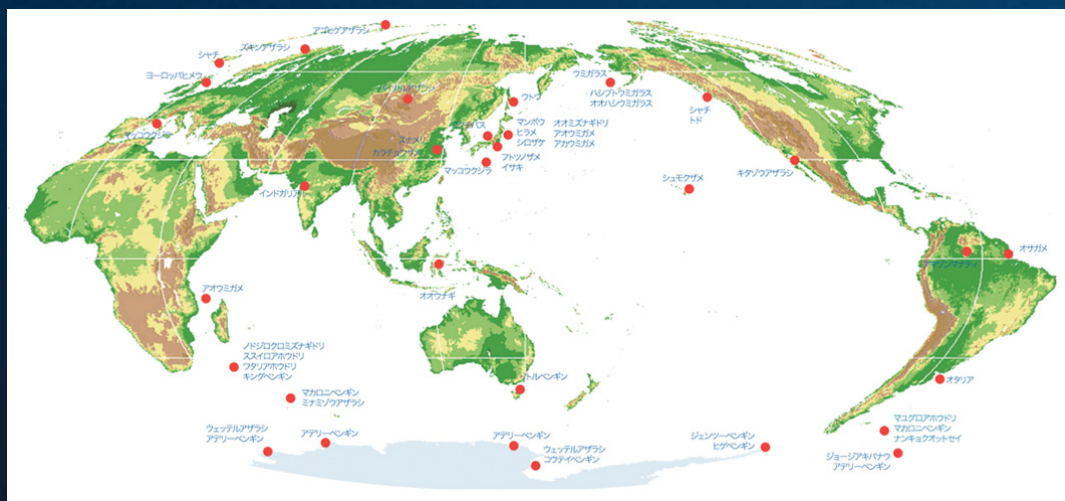
小型の記録装置を動物に取り付けるやり方で進めるバイオロギングは、装置が開発されたおかげで可能となった、新しい研究分野です。陸上動物の常識を覆すような発見や、事前に想定していなかった意外な発見が相次いでいます。良い意味でプリミティブな段階にあるバイオロギングの研究成果は、専門家以外の世間の人々にも十分理解してもらえる内容を多く含んでいます。

UTBLSでは出前授業や実験風景の公開、わかりやすく記した一般書や絵本、ウェブサイトや博物館による企画展示などを通してアウトリーチを進めてきました。今後もさらに積極的なアウトリーチを展開していきます。

(佐藤克文:UTBLS研究推進責任者)



これから発信器を付けて放流されるアカウミガメを見送る小学生たち

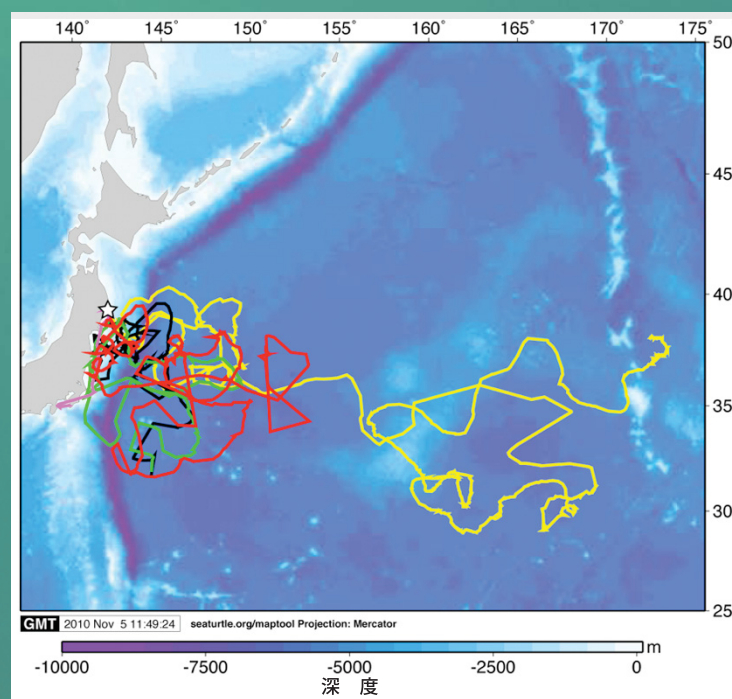


UTBLSが関わる野外調査地とその対象動物

### 研究1

(嵯崎友子)

#### 実はウミガメ研究のメッカ、岩手県



岩手県沿岸で放流されたアカウミガメ4頭の回遊経路を1年近く追いかけてきました

ウミガメ類の調査は、これまで主に熱帯域から温帯域に存在する産卵場周辺で行われてきました。そのためか、ウミガメというと暖かい海の動物というイメージがあるかもしれません。しかし実は、産卵場から遠く離れた三陸沿岸海域に、夏から秋にかけて多くのアカウミガメが来遊します。さらに、人工衛星対応型発信器を用いて回遊経路を調べた結果、アカウミガメは三陸沖から黒潮続流周辺などの幅広い海域を利用していることがわかってきました。



人工衛星対応型発信器を付けて泳ぐアカウミガメ

### 研究2

(青木かがり)

#### 深海のハンター マッコウクジラ

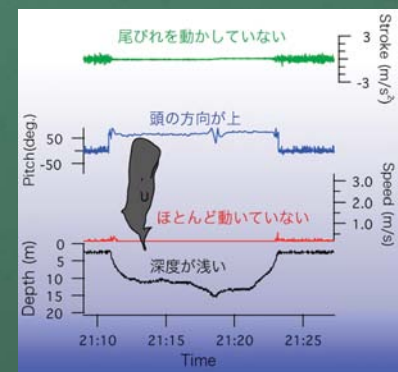


マッコウクジラは、イカなどを捕食するために、深度1000mを超える潜水を行います。しかし、その捕食シーンを深層でとらえた映像はありません。クジラに取り付けられた静止画データロガーが、その姿を映し出す日は近いかもしれません。

静止画データロガーを付けたマッコウクジラ



深度900mで得られた静止画像。下側に写る白っぽいものがマッコウクジラの頭(矢印)。写真の上半分(白丸)には餌生物らしきものも写っていますが、光量が足りないためにそれが何であるのかわかりません。装置の改良が必要です。



マッコウクジラの背中に付けたデータロガーが記録した、背腹方向加速度(緑線)、体軸角度(青線)、遊泳速度(赤線)、そして深度(黒線)の時系列データ。海面近くで頭を上に向けて休息するマッコウクジラの様子を表しています。バイオロギングによって初めて明らかになったこの行動は、世界各地のマッコウクジラに共通して見られました。

### 研究3

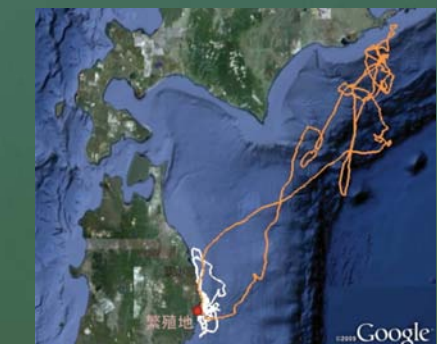
(塩見こずえ)

#### オオミズナギドリの長距離「通勤」

三陸沿岸の島嶼で繁殖するオオミズナギドリは、数ヶ月かけてペアで子育てをします。この間、ほとんどの餌獲りを島付近の海域で行いますが、時々島から500km以上離れた北海道周辺海域までわざわざ餌を求めて出かけることがGPSデータロガーによって判明しました。



オオミズナギドリのペア



繁殖地(赤丸)を出発して島周辺で餌獲りをする個体(白線)と北海道東岸まで出かけて餌獲りをする個体(オレンジ線)の移動軌跡

# 「船乗り」って どんな仕事?

撮影 キベジュンイチロウ(有限会社/トコード)

写真左から、今野さん、桐ヶ谷さん、西浦さん。乗船歴42年の熟練の船乗りたちです

西浦力雄さん、桐ヶ谷信一さん、今野啓さんの3人は、1967年に同期で就職して以来2009年3月に定年を迎えるまで、日本沿岸海域を対象とする「淡青丸」と世界の海を対象とする「白鳳丸」に乗船勤務しました。今回はこの3人に、船に乗り組む人々について教えてもらいます。



後に甲板長・観測長をつとめた桐ヶ谷さんが、甲板員としてまだ駆け出しの頃のスナップ。1971年、初代白鳳丸にて

## ◎船員

船員は「士官」と「部員」の2つに大別されます。士官は海技士(航海・機関・通信)や医師の国家資格をもち船長、機関長、航海士、機関士、通信士などを務めます。そして、士官のもとで各部に分かれてさまざまな実務に当たるのが「部員」と呼ばれるスタッフです。白鳳丸・淡青丸では甲板部、機関部、事務・電子部、医務部(白鳳丸のみ)が設けられ、部員が所属しています。学術研究船ではこの「船員」のほかに「研究者」が乗船し、観測・調査を行います。

## ◎船長

船の最高責任者。外界から独立した船の世界においては、船内の人に対して必要な命令を下せるなど絶大な権限をもちます。

## ◎甲板(こうはん)部

士官として一等～三等航海士、部員として甲板長・観測長・操舵手・甲板員が所属。運航・船体整備、航海用機器の保守・点検な



2003年、淡青丸で甲板長(ボースン)として観測機器設置準備を行う西浦さん(写真左端)

ど航海に関わる実務全般を担当。学術研究船ではさらに観測機器の投入・揚収が重要な業務となります。

## ◎機関部

士官として機関長・一等～三等機関士、部員として操機長・電気長・操機手・機関員などが所属。船の心臓部であるエンジンや発電機の起動・操作・整備を担当します。学術研究船では観測機器を吊るワイヤーを巻き上げるウィンチの操作も機関部の仕事。



2003年、淡青丸左のエンジンを点検する操機長の今野さん(写真右)。

## ◎事務・電子部

士官である通信長・電子長が所属し、かつてはモルス信号の送受信、現在ではインマルサット(衛星電話・データ通信)の通信を担当、また、事務全般を兼任しています。そして、乗員全員の食事作りを担当する司厨長・司厨手・司厨員の部員もここに所属。どんなメニューが出るかは航海中の大きな楽しみでもあります。

## 航海のエピソード

仕事をしながら世界中に行けるのがいなと思っていました。航海途中の寄港地で泳いで遊んだり、当時日本では高価だった煙草や洋酒をお土産にしたりしたのは楽しい思い出です。白鳳丸と淡青丸のどちらが好きかって? 船は「仕事ときは1トンでも小さいほうが、時化のときは1トンでも大きいほうがいい」と聞いたことがあります。いざ時化にあったときは大きな船は揺れが少なく安心なんです。いろいろなことがあった42年間、終えてみればあつという間でした。(西浦さん)

航海は自然現象に左右されます。最も大変だったのは1989年、白鳳丸の世界一周航海のときに大西洋で遭った大時化。私はちょうど当直にあっていました。船が左右に何度も傾いて、45度までしか目盛りのついていない船の傾斜計が最大で43度まで傾きました。翌年、船の先端部が帯電してピカピカ光る「セントエルモの火」という現象を目撃したのも思い出に残っています。ホテルがたくさん止まっているようでした。タヒチとハワイの間での出来事でした。(桐ヶ谷さん)

機関室の仕事は感覚をフルに使います。エンジンのたてる大きな音を耳栓をしながら聴き、目で見て、手で触れて熱さを確かめ、煙を鼻で嗅いで調子確かめる。舌で舐めてみて油や海水の混じり具合を調べたりもします。機関室は船のいちばん大事な心臓部。動力だけでなく電気も起こすし、海水を真水に変えるのも機関室の仕事。万一機器をうまく直せなかったら大変なことになります。でも、幸い大きな故障なく42年間を過ごせてよかったです。(今野さん)

## 学術研究船 淡青丸・白鳳丸とは

学術研究船淡青丸は、全長51メートル、国際トン数610トンの中型研究船。主として、日本近海の調査研究に使われています。

学術研究船白鳳丸は、全長100メートル、国際トン数3,991トンの大型研究船。遠洋・近海を問わず世界の海を舞台として、長期の研究航海に使われています。

ともに全国の研究者に広く共同利用され活躍しています。2004年度からは独立行政法人海洋研究開発機構(JAMSTEC)に乗組員と船が移管され、東京大学大気海洋研究所とJAMSTECが共同運営にあっています。



学術研究船 淡青丸



学術研究船 白鳳丸

## 書き手自身による新刊紹介

### 魚類生態学の基礎

塚本勝巳 編  
B5判・320頁・4725円(税込)  
恒星社厚生閣・2010年8月刊

目覚ましい展開を見せる現代魚類生態学の広さと深さを、25名の新進鋭の研究者がいきいきと解説したコンパクトな入門書です。学生諸氏はもちろん、他分野の熟練研究者や一般の魚好きの方々も、この一冊を読めば最新の魚類生態学の基本的事柄は全てわかる実戦的な本となっています。概論、方法論、各論の3部構成はどこから読んでもよく、それぞれ魚類生態学における重要な概念、主要な研究手法、多様な研究展開を知ることができます。魚の不思議な行動や社会、特異な生態や生活史に、大きな興味と探求心を持っていただければ幸いです。(塚本勝巳)



### ぺんぎんぺんぎんドボンドボン

(『ちいさなかがくのとも』2010年12月号)

佐藤克文 文/平子真理 絵  
20×23cm・24頁・410円(税込)  
福音館書店・2010年12月刊  
(購入は版元ウェブサイトまで)

この絵本の元になっているのは、バイオリングによる研究成果です(Takahashi A., Sato K., Nishikawa J., Watanuki Y. and Naito Y. 2004. Synchronous diving behavior of Adélie penguins. *Journal of Ethology* 22:5-11)。想定する読者は、コミュニケーションが成り立つぎりぎりの3歳児以上。まわりくどい説明無しで、どこまでおもしろさが伝えられるのか。いかに子供達の想像力をかき立て、どうやったら「もっと知りたい」という知識欲を刺激できるのか、一本原著論文が書けるくらいの時間と労力を費やしてストーリーや構図を考えました。20年後の大学院面接試験で「子供の時に読んだ絵本がきっかけで……」などと言う受験生に出会ったら、◎を付けてしまいそうです。(佐藤克文)



## 受賞

小松 輝久 准教授  
日仏海洋学会賞

受賞題目

「藻場の環境と生態および分布に関する研究」



北川 貴士 兼務助教  
(大学院新領域創成科学研究科 助教)

第9回 日本農学進歩賞

受賞題目

「クロマグロ *Thunnus orientalis* の行動生態と水温適応機構に関する研究」



伊藤 幸彦 助教

平成22年度岩手県三陸海域研究知事賞

受賞題目

「三陸沖暖水塊の構造・移動特性と熱・塩分輸送に及ぼす影響」



## 人事異動

発令日	氏名	異動内容	新職名・所属	旧職名・所属
H22.10.20	中村 恭之	辞職	海洋研究開発機構技術研究主任	助教・海洋底科学部門

# Event Report

イベントレポート

## 火災訓練



自衛消防隊通報連絡班による非常放送訓練。1階監視室にて

2010年10月7日(木)、柏キャンパス移転後、初めての火災訓練を実施しました。

11時から、大気海洋研究所棟(新棟)において、3階セミナー室で出火したという想定で、感知器の発報、防火扉・防火シャッターの作動(3階のみ)、消防署への通報等(今回は設備センターに通報)の後、誘導にしたがって、また建物内に逃げ遅れ者がいないかを確認しながら集合場所の玄関前へ避難しました。また、避難後には人員確認を行うなど、実戦さながらの訓練を行いました。なお、教職員・学生を合わせて約200名の参加者がありました。

14時から、柏キャンパス防災訓練が行われ、誘導にしたがって、建物内に逃げ遅れ者がいないかを確認しながら集合場所の玄関前へ避難し、人員確認などを行った後、柏図書館東側に移動しました。その後、柏消防署の講評、柏キャンパス災害対策本部長から訓練参加者への謝辞が述べられ、柏キャンパス防災訓練は無事終了しました。さらに、体験訓練(消火器・起震車・煙体験・梯子車)が実施され、16時頃に全日程が終了しました。

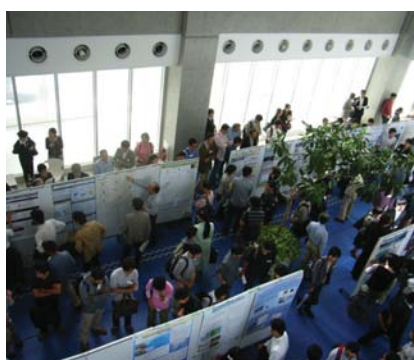
10月7日(木)は一日中訓練でした。(関 豊)

## 2010年度日本プランクトン学会・日本ベントス学会合同大会

10月8～11日(金～月)の4日間、日本プランクトン学会と日本ベントス学会の合同大会が開催されました。講堂と大講義室を口頭



柏キャンパス一般公開の催し「紙芝居「おにぎりとうみ」に聴き入る子どもたち



ポスター発表で賑わうエントランスホール

発表会場、エントランスホールをポスター発表会場として、それぞれ94題と65題の発表がおこなわれたのに加え、2件の自由集会和10日の午後には「プランクトンとして見るベントスの研究」と題された公開シンポジウムも開催されました。昼食は「はま」のお弁当、懇親会は「憩い」で開催と柏キャンパスの施設を最大限に活用し、300人近い参加者による移転後初の学会大会を大きな混乱もなく終了することができました。御協力いただいた所員の皆様にお礼を申し上げます。(小島茂明)

## 掘場国際会議「西部太平洋域における海洋科学の新しい展開」



国際機関や政府関係来賓の祝辞が続く開会式

2010年10月26～29日(火～金)、ユネスコ/政府間海洋学委員会の創立50周年を祝い、Byun副議長や各機関の代表、東南アジア5カ国(インドネシア、タイ、フィリピン、マレーシア、ベトナム)の研究者、およびわが国の研究者など100名を越す参加のもと、大気海洋研究所講堂において国際会議を開催しました。主に西部太平洋域において10年間、大気海洋研究所が中心となって進めていた日本学術振興会拠点大学事業「沿岸海洋学」プロジェクトの最終年度として、研究成果の大集成をしました。わが国のリーダーシップに一段と期待が寄せられています。参加者のみなさんは、ポスター発表や、最終日に始まった柏キャンパス一般公開も大いに楽しめました。(植松光夫)

## 柏キャンパス一般公開

2010年10月29・30日(金・土)、柏キャンパスの一般公開が行われ、大気海洋研究所も柏キャンパスの一員として初めてこれに参加しました。柏図書館のメディアホールで西田所長による講演が行われたほか、中野キャンパスでの一般公開の経験をふまえて、タッチプールや水槽、深海魚類の標本展示、紙芝居、海藻押し葉など子どもたちに人気の企画をそろえました。また、研究成果のパネル展示、流体実験、ロープワーク、海洋観測風景のビデオ放映などもあり、子どもから専門家まで楽しめるよう内容に工夫を凝らしました。週末にかけて台風が接近するというあいにくの空模様でしたが、2日間で約1600人もの来場者があり、盛況のうちに終了しました。(道田 豊)

## 大気海洋研究所OB会

2010年11月2日(火)、大気海洋研究所の柏キャンパス新研究棟の披露を兼ねたOB会が開催されました。懇親会に先立って行われた研究所・新研究棟概要説明会には約50名が参加し、新たな研究教育拠点として大気海洋研究所がスタートした経緯や展望についての西田所長の説明に熱心に聞き入られていました。施設見学会では、新研究棟や観測機器棟を見学し、それらの機能性の高さに感心されていました。

懇親会では、現職の教職員と教職員・学生OBら約180名が50年の歩みを振り返るとともに、今後の発展に向けて抱負を語り合いました。またOBの方々からのスピーチでは、現役時代の研究の取り組みや様々なエピソードが披露され爆笑を誘うとともに、研究所の今後のさらなる発展を期待しているとの声援が送られました。(菊地みつ子)



西田所長による研究所・新研究棟の概要説明

## HADEEP国際シンポジウム “Trench Connection”と「深海展」



「深海展」の「見る」コーナーで熱心に写真を撮る来場者

5年間続いたHADEEPの集大成として、国際シンポジウム“Trench Connection”、および「中高生のための深海展」が、11月10～13日(水～土)、大気海洋研究所と日本財団ビルで開催されました。“Trench Connection”には、英国、イタリア、ロシア、米国、日本など9カ国から103名の参加登録があり、49の演題が発表されました。出席者からは、すばらしい研究所での有意義で充実したシンポジウムだったと賞賛の声が寄せられました。シンポジウムの一環として日本財団ビルで開催された、深海魚を見て触って食べる「中高生のための深海展」には、中高生のほか、理科教員、父母など、400名以上もの参加があり大盛況でした。来年も開催してほしいとの声もありましたが、HADEEPは今年度で終了、残念です。(塚本久美子)

## 一般公開講座 「異常気象の謎に挑む」

2010年11月19日(金)、気候システム研究系は本郷キャンパス大講堂(安田講堂)にて一般公開講座「異常気象の謎に挑む」を開催し、短い準備期間にも関わらず300人を超える多くの方々にご参加いただきました。講演では、今年の夏やその前の冬に発生した世界規模の異常気象を例に挙げながら、異常気象の要点や原因、地球温暖化との関係についてのこれまでの科学的知見を紹介しました。続くパネルディスカッション「異常気象 何でも質問タイム」では、講演内容への質問はもちろん、それ以外にも新聞報道に関することや最新の温暖化研究についてなど、参加者から多くの質問が寄せられ、異常気象や気候変動・気候変化への関心の高さを改めて感じました。(横井 寛)



パネルディスカッションで質問に答える講演者

## AORI スタッフ日誌②

事務部長室

大気海洋研究所には、教育研究活動を支援するさまざまな職種のスタッフが勤務しています。このコーナーでは、スタッフの仕事を通じて、研究所の活動を別の角度からご紹介します。

本研究所の事務部は、総務課、経理課および国際沿岸海洋研究センター事務室(岩手県大槌町)から成っており、約40名のスタッフで研究教育活動に必要なあらゆる事務的な支援を行っています。なお、柏キャンパスに所在する他の部局は「柏地区共通事務センター」に一部事務を委ねていますが、本研究所は部局事務部において独立・完結した事務処理を行っているところが特徴であり、機動的な対応ができていると思っています。

“事務部長の仕事”としては、事務部業務の統括(平易に言えば立案・企画のチェック・最終決定、OJT(on-the-job training)など)、および時折起こる難題(?)の解決、また所長室会議など諸会議に出席し管理運営に関して事務的な観点から助言を行うことなどになります。また、アフター・ファイブには事務部長室隣の会議室で月1回くらい開かれる酒場で亭主を務めることもあります。運よく開店時間に通りかかった方はどうぞお立ち寄りください。

さて私こと、平成20年4月から旧海洋研究所に勤務し、中野から柏キャンパスへの移転、平成22年4月の大気海



事務部長室にて執務中



洋研究所の創設等に携わってきましたが、いよいよ来たる平成23年3月で大気海洋研究所および大学を「卒業」することになります。事務部の職員には、引き続き上司との連携のもと視野広く情報・知識を吸収し自律して適時適切な判断・動きができるよう自己研鑽に努めていただき、上司および教員から信頼される存在であってほしいと思います。そして事務のプロとしての自信と誇りをもって教員との協働体制を築いていってほしいと願っています。最後になりましたが、事務部の皆さまならびに研究部門等の教職員の皆さまのご協力・ご指導に感謝申し上げます。大気海洋研究所のますますの発展を祈念しております。

(池田貞雄)



中庭の芝生の手入れも部長が担当

撮影/キベジュイテロウ(有限会社/トコード)

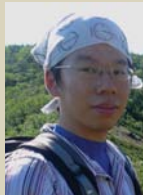


## 「自分にできる恩返し」

### Report ⑤

#### 梶原 佑介

気象庁観測部観測課観測システム運用室  
理学系研究科地球惑星科学専攻  
海洋研究所海洋物理学部門  
修士課程 2007年3月修了  
(新野研究室)



小学校の文集に将来の夢は「気象庁」と書くほど昔から天気バカだった私は、修士課程修了後、念願がなつて気象庁に入り、現在は上空の風を測るウィンドプロファイラと呼ばれるレーダーに関するシステムの運用管理や技術開発を行っています。採用当初は統括的な部署にあり、そこまで専門的知識が要求されることはありませんでしたが、今の部署に移ってからは、もっとしっかり気象学を学んでおけば良かったなあと思わされることもしばしば。みなさん、

後悔のないよう勉強はきちんとやっておきましょう！

そんな私が前身の海洋研究所に「研究で」お世話になっていたのは平成16年秋から平成18年までです。学部4年の頃から2年半にわたり大気海洋力学分野の新野宏先生にご指導いただきましたが、就職後もテニスやら飲み会やらでちょくちょく海洋研には訪れ、海の日的一般公開や海洋研引越しにあたっては当然のようにお手伝いして(させられて!?)いました(笑)

今般、その海洋研も気候システム研究センターと統合し、ますます気象庁と密接な関係にある機関となりました。気象庁は、気象機関・

防災機関としての主導的な役割を担っていますが、その業務は気象学・海洋学・地震学など様々な学問の知識に基づいて行っており、研究機関とは互恵的な関係にあるといえます。研究成果を材料として分けていただき社会との間に立派な橋を架けていくことこそ、ここを巣立った自分ができるせめてもの恩返しではないか、といった思いを胸に業務にいそむ毎日を送っています。



入庁同期たちと気象庁前にて  
(左から3番目が筆者)

## 新スタッフ紹介

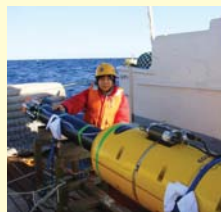
今回は、今年度新たに東京大学に採用されたスタッフ4名を紹介します。

①氏名・所属、②出身地、③趣味、④抱負などひとこと。



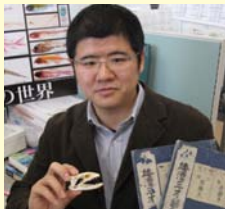
引越し直後の「本に占拠されている(?)」自分の部屋です

- ①荒井 泰之(総務課一般職員(総務チーム))
- ②長野県
- ③読書です。繰り返し読むのは19世紀後半の海外小説。科学の啓蒙書や学術書を読むこともあります。
- ④現在、主に人事・給与・庶務に係ります総務チームで働いておりますが、一刻も早く業務に習熟し、教職員の皆様のお役に立てたらと考えております。



本郷にいた時からこの測器で深海の乱流を計測をしています

- ①長澤 真樹(技術職員・共同利用共同研究推進センター観測研究推進室)
- ②千葉県浦安市
- ③猫と遊ぶこと(3匹います)、買い物
- ④大学院卒業以来、8年間、本郷キャンパスで海の研究を行っていました。観測航海に出かけた船では、多くの方々にお世話になりました。これからは、観測支援を通して全国の研究者の方々のお役に立ちたいと思っています。



お宝? 倭漢三才圖會(江戸時代の本)とウツボの頭骨!

- ①渡邊 太郎(技術職員・共同利用共同研究推進センター陸上研究推進室)
- ②埼玉県さいたま市
- ③釣りや魚本蒐集、市場巡り、骨格標本作製など、魚に関することあれこれ
- ④今年度より発足した陸上研究推進室の技術職員として、遺伝子・RI施設を中心に生物系の各施設を担当しています。皆さんと協力し、快適な研究環境を整えていきたいと思えます。



見学者へのアテンドも広報室の業務。VIPを前に大緊張!

- ①佐伯 かおる(特任専門職員・広報室)
- ②札幌。いちばん長く住んでいたのは京都
- ③YOGA、室内菜、すごく簡単で美味しいレシピの探究、やや歴史
- ④着任前は、京大の出版会で歴史・地理・人類学などの書籍の企画・編集をしていました。理科系の研究所ということで、所内の方々に教養を仰ぎつつ、良い意味での「門外漢」視点を生かして所外とのコミュニケーションを促進できればと思っています。



## 編集後記

柏キャンパスで迎える初めての冬となりました。良く晴れた日の夕方、西向きの窓から望む、茜色の空に映える富士山のシルエットが泣かせてくれます。中野時代の、まるでお仕置き部屋のような薄暗い隙間風の吹き込む地底暮らしを思い出すと、またまた泣けてきます。とは言いつつも、しみじみと感傷に浸る間もなく、パンフレット、ニュースレター、要覧/年報と、出版編集小委員会と広報室は新研究所設立からフル稼働中です。みなさま、応援どうぞよろしくお願いいたします(お)